

研究発表 1

「図書館職員のスキルを向上させるには ー管理職の立場からー」

東海学園大学図書館 峯野 幸子

図書館が学修支援を機能として担うようになってから約 10 年が経とうとしている。

何をもって学修支援とするかは、各大学図書館の事情によると思うが、レファレンスの占める割合が大きいのではないだろうか。

そもそも、図書館職員は冊子媒体（図書や雑誌）に掲載されている情報を提供することを主な支援業務として行っていたが、近年の情報探索に関連するツールの増加により、その内容や範囲が大きく変化してきた。このツールの増加に伴い、利用者のニーズもより具体的になり、専門性を帯びるようになってきた。このような利用者のニーズに応えるために、私たちは、単に情報を収集し知識として蓄積したもの提供するだけでなく、他の職務とのつながりを考え、そこに活用できるものはないかを常に引き出しとして持っている必要があると考える。

他の職務とのつながりという点において、図書館システムが導入され、仕事効率が上がった反面、個々の職務が独立したものと考えられるようになり、その職務自体が持つ意味や、他の職務への影響などを考えることがなくなった。企画などにおいても同様の傾向がみられる。

本学図書館でも、膨大な情報の中から、いかに利用者のニーズに合うものをアドバイスできるか、を学修支援の主な業務として行っている。専任以外の職員も同様の業務を行うため、個々人のスキルレベルの均一化が求められている。しかし、ここ数年で様々なツールを提供できる環境を整備しつつあるが、職員のスキルに差があるのが現状である。

そこで、各職務の基本事項や必要性、関連事項などの情報を共有しながらスキルの向上を目指す、ということをも具体的な事例を交えて述べたい。

研究発表 2

『お昼の学生講座』を通して学んだ、図書館職員に必要なこと

北陸学院大学ヘッセル記念図書館 飯野 昌子

北陸学院大学ヘッセル記念図書館は 1981 年に開館し、当初 7 名だった司書が、現在常勤職員 2 名と臨時職員（4 時間勤務）1 名まで削減されてきた（2013 年 4 月からの体制）。

そのような状況の中、図書館の PR に特化した「図書館サポーター」を 2013 年 7 月に立ち上げた。また図書館サポーターの力を借りて、学生自らが講師を務め自主的に教える『お昼の学生講座』を、図書館内のライブラリー・ラーニング・commons (LLC) で開講（2015 年 6 月～）し、継続した活動を行っている。「がんばって作った成果、みんなに教えたいこと」を発表するイベントである『お昼の学生講座』は、司書と図書館サポーターとのカウンターでの会話から始まった。誰もが参加できる図書館の空間で、小学校の指導案を、復習を兼ねて披露したり、特技の切り絵でしおりを作成したり、自由なテーマでお昼休みの 15 分間開講し、図書館サポーター以外の学生も講師になり、裾野を広げている。

「人手が足りなければ学生や教職員の力を借りよう」という発想の転換がどうしてできたのか、学生との関わりや、私自身が目指す司書としての目標を振り返る中で見えてきたのは、カウンター業務の重要性である。学生講座の講師を発掘する「面白い」能力、新しい事を「思いつく」能力はカウンターでこそ磨かれ、「元気な図書館」を実現できているのではないかと考える。

研究発表 3

「広島修道大学図書館～現在試行中～」

広島修道大学図書館 木村 千鶴

今回のテーマである「学修支援を担う大学図書館職員の可能性を探る」は、まさに、私自身が課題として日々考えていることであり、この機会をいただき、取り組んでいる内容について整理してみたいと思った。

平成 24(2012)年 8 月 28 日付の中央教育審議会の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」においては、「学修」という言葉の定義、主体的な学修を促す能動的学修（アクティブラーニング）などが取り上げられ、学士課程教育の質的転換は「待ったなし」の課題とも書かれている。また、「学修支援環境の整備についての課題」には図書館の充実が謳われ、「今後の具体的な改革方策」には、学部等の縦割りの構造を超えて繋いでいく存在として、職員等の専門スタッフの育成が必要とある。

まさにこの時期、2010 年 4 月に 6 年ぶりに図書館に再配属となった私は、電子化が進み、学修環境、内容ともに変化している図書館の運営についていけない喪失感を味わっていた。書誌をとるという希望は消え、中間管理職として運営に関わる中で、どうすれば自分の気持ちが変わり、新しい図書館員としての役割を果たしていけるのか、また、組織運営に関わりながら、図書館員の育成をどのようにして行っていけばよいのかを考え、取り組んできたこと、現在取り組んでいること、今後について考察したい。

研究発表 4

「小規模大学図書館の特性を活かした学生との協働による学びのコミュニティ形成Ⅱ」

長崎ウエスレヤン大学附属図書館

菅原 良子、植松 久子、南 慎郎

長崎ウエスレヤン大学は、九州の西の果て、長崎県央地域の諫早市に存在する収容定員 580 人の地方小規模大学である。今年創立 135 周年のキリスト教の信仰から生まれる価値観を基盤としている大学である。昨今の厳しい少子化現象により、ご多分に漏れず定員割れが続く本学であるが、その中において本学図書館ならではの可能性を追求する姿勢を崩さないことが大きな特徴と言えよう。

本学図書館には、図書館のサポートサークルとして「ぶっく倶楽部」というものがある。大学開学の翌年 2003 年に結成以来、今日までずっと大学図書館活動をサポートしてきた。部員数は、32 名平均を誇り、これまで 14 年で延べ 453 名の学生が在籍してきた。近年では、学生の主体的な学びを促すことを目的に様々な取り組みを行っており、特に 2013 年度から取り組んでいるビブリオバトルでは、首都決戦出場を果たし、貸出数の増加や、様々な形で関わった学生の変化といった成果をもたらしている。当然のことながら、学生の質は毎年変わる。「ぶっく倶楽部」もまた、多種多様な資質・能力の学生メンバーが集まることにより、志向性やパフォーマンスが変化・変質する。彼ら／彼女らと協働する教職員も臨機応変な対応が求められることとなる。枠に囚われない動きのできる職員が求められている。

本発表では、図書館に関わる教職員と学生の協働による様々な活動をとおして、どのような「学びのコミュニティ」が形成されてきたのか、また、それとともに、小規模大学図書館の在り様についても継続して考えていく。